

特集

クロストーク

布と空間デザイン

— インドの躍動感を伝える

登壇者

金谷 美和

山中 コージ

山下 麻子

五十嵐 理奈

上羽 陽子

小関 万緒

コラム

中谷 文美

山中 由里子





自然を生かす

「鶴岡のきびそプロジェクト」

須藤 玲子

生物、自然を模倣した技術を「バイオミミクリー」と呼ぶ。初期の代表例には、蚕のつくる絹糸を真似たナイロン、愛犬にくつついた野生「ぼっ」の実をヒントに生まれたベルクロ（面ファスナー）などがある。また最近では、絹糸のタンパク質成分の一つであるフィブロインの構造に着目し、シルクの手触りと光沢、軽さを併せ持つシルクを超えるポリエステル繊維の開発がおこなわれているという。このように、自然界の優れた機能を模倣し、活用することで人間の生活を豊かにする夢を追った科学者たちの努力は、繊維製品だけでなく私たちの生活の中にさりげなく存在している。

さて、タイトルあげた「鶴岡のきびそ」は、その絹糸とともに生まれている、もう一つのシルクと呼び名だ。繭から糸口を手繰っていく過程でできる副産物である。繰糸工程に動力機械が導入されてから、様々な副産物、廃棄物が発生することになるが、その一つだ。かつては紡績糸などに再利用されたが、二〇〇三年以降、国内の絹紡糸メーカーの縮小に伴い、原料としての需要が減少し、再利用されなくなった。繭を構成する成分は繊維タンパク質のフィブロインと、接着の役割を持つ水溶性タンパク質のセリシンだ。鶴岡では、この水溶性タンパク質であるセリシンが、抗菌性、吸湿性、難燃性、UVカットなどの機能を備えていることに注目した。絹紡糸として使われないきびそが、化粧品などの添加物に活用されてきた理由でもある。

鶴岡は養蚕、製糸、製織、精練、染色、そして縫製まで、絹製品づくりを一貫しておこなう日本の稀有な産地である。きびそは繊維が太く不均一で、固くてゴワワワしているため、織物の素材として利用するには、一〇分の「ぐらいいに細くすることが求められる。」「きびそプロジェクト」では、試行錯誤の末、繰糸工程でのひと手間によりそれを実現し、しなやかで艶やかな絹とは異なる、もう一つの絹を実現した。最近ではきびそ糸をオーガニックコットン、生育が早く農薬が不要なヘンプ、麻などと混紡することで用途も広がっている。絹は、日本国内において生産される天然繊維の一つだ。きびそは生物を生かし、環境への負荷を少なくし、先人たちから未来へ受け継ぐ役割を果たしていると言える。

プロフィール

1953年茨城県生まれ。株式会社布代表。東京造形大学名誉教授。2008年より株式会社良品計画、山形県鶴岡織物工業協同組合のテキスタイルデザインアドバイザーを手がける。2016年より良品計画アドバイザーボード。毎日デザイン賞、ロスコー賞、JID部門賞等受賞。日本の伝統的な染織技術から現代の先端技術を駆使し、新しいテキスタイルづくりをおこなう。作品はニューヨーク近代美術館、メトロポリタン美術館、ボストン美術館、ロサンゼルス州立美術館、ビクトリア&アルバート博物館、東京国立近代美術館他に永久保存されている。

目次

- 1 エッセイ 千字文
自然を生かす
「鶴岡のきびそプロジェクト」
須藤 玲子
- 2 特集
クロストーク
布と空間デザイン
—— インドの躍動感を伝える
金谷 美和、山中 コ〜ジ、山下 麻子、
五十嵐 理奈、上羽 陽子、小関 万緒
- 3 コラム 1
誘う展示
—— 「考える素材」としての布を見せる
中谷 文美
- 7 コラム 2
「境界性」の空間デザイン
山中 由里子
- 10 みんぱく回遊
異類変身の旅
島村 一平
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド
マヤの地にかかわって半世紀
八杉 佳穂
- 16 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界
バスケットリーを楽しむ
本間 一恵
- 18 シネ倶楽部 M
南インド古典音楽界の光と影
—— 「世界はリズムで満ちている」
小尾 淳
- 20 ことばの迷い道
ママ！
児島 康宏
- 21 編集後記・次号の予告

表紙

企画展示場にて、照度制限のなか印象的にライティングを調整する（撮影：道広明日香、2021年）



1: 展示場入口のサリーとターバン。奥に見える戸口飾り布をくぐって第1章へと続く
2: 布だけではなく解説パネルもホース仕器に取り付けている

クロストーク

特集

布と空間デザイン

—インドの躍動感を伝える

企画展「躍動するインド世界の布」では、布の役割や機能に注目し、インド社会をつくりだしている人びとの営みを多彩な布とともに紹介している。その展示空間はどのように構築されたのであるのか。本特集では、二〇二一年一月二三日に開催したクロストーク「布と空間デザイン——インドの躍動感を伝える」を再録し、展示づくりの舞台裏に迫る。

金谷 本クロストークでは、企画展「躍動するインド世界の布」の展示設計を担当されましたGENETO ARCHITECTSと企画展メンバーによって、普段は隠されていて見ることのできない展示設計から設営のプロセス、布の展示手法といった展示づくりの舞台裏を紹介いたします。

じつは、布は展示が難しいとされています。なぜなら、布の使用状況を再現することが難しいからです。本企画展では布を展示する際にどのような手法を使っているのか、保存科学の観点からの制限は何か、展示デザインをつくるにはどういったことか、などについての話をさせていただきます。まずは、展示コンセプトについて始めましょうか。

上羽 展示場の入口には、みなさんご存知のサリーとターバンが吊るされています。これまでインドでは、このような一枚布を巧みに変形させて、さまざまな

形でまとう着衣文化があることが注目されてきました。しかし、インド世界の布は衣服としてだけでなく、人生儀礼における贈与品や神がみへの奉納品、社会運動でのシンボルといった多様な役割を担ってきました。今回の企画展では、このような布の機能や役割に注目しています。第一章「場をくぎり、人をつなぐ布」、第二章「神にとどく布」、第三章「政治をうごかす布」、第四章「布がうみだすグローバル経済」の四章構成となっています。

本企画展は、南アジア地域研究国立民族学博物館拠点(MINDAS)の分班「布班」による共同研究の成果公開となっています。布を主体とした展示をどのように組み立てていくか議論していくなかで、建築を専門とするGENETO ARCHITECTSに展示設計を依頼しました。

企画展「躍動するインド世界の布」

会期: 2022年1月25日(火)まで
場所: 本館企画展示場



小関 万緒
民博 企画課標本資料係職員
標本資料の管理や保存を担当

クロストーク
登壇者



五十嵐 理奈
福岡アジア美術館学芸員
アジアの近現代美術の研究が専門



上羽 陽子
民博 人類文明誌研究部准教授
本企画展リーダーで染織研究が専門



山中 コ〜ジ
GENETO ARCHITECTS
代表・建築家



山下 麻子
GENETO ARCHITECTS
デザイナー



金谷 美和
国際ファッション専門職大学准教授
手仕事に関する文化人類学が専門

コラム 1

誘う展示 「考える素材」としての 布を見せる

中谷 文美
岡山大学文明動態学研究所教授

「布」と「躍動」。このふたつのワードが頭のなかで違和感なく結びつく人はどれだけのいるだろう。現代日本の文脈で布から連想されるのはまず衣服であり、しかも着物生地のように、躍動というよりは端正な布の印象のほうが勝ってしまうのではないだろうか。

だがアジアやアフリカのどこかに滞在した経験のある人なら、生活のあらゆるシーンを彩り、さまざまな表情を見せる布たちと出会ったことがあるはずだ。わたしが三〇年にわたって足を運んでいるインドネシアの各地でも、布は多種多様で色彩豊かで、常に圧倒的な存在感を放っていた。

では企画展「躍動するインド世界の布」で、布はどのように躍動しているだろうか。

まずは入口近くに、数種のサリーとターバンが揺れている。いずれも身体

ホース什器

上羽 展示場では、緑色のホースが目立っていますね。このホースを什器として使うというアイデアは GENETO さんに出していただきました。このアイデアはどのように生まれたのでしょうか。

山中 最初このお仕事をいただいて、わたしと山下と一緒にどのような展示にしていくなか構想を立てているときに、いただいた資料などをと、インドのことを勉強いたしました。市街のなかでの人びと



の暮らしぶりなどを見ていくなかで、わたしたちの心に留まったのが、ブルーシートやプラスチック製のバケツや椅子で、そのなかのひとつにホースがあったんですね。そのようなケミカルな素材



が、じつはインド社会のなかに結構あって、それが自然物と絡まり合いながらひとつの街をつくっているというか、社会をつくっているんじゃないかというところで、ぜひともこのホースを使ってみたいかどうかと思うに至りました。

上羽 最初にホースを提案されたときは、「えっ、ホースってあのホースですか？」と三回ぐらい聞き直しました。透明や黒色のホースなのかなと思ったら、「いえ、緑色です」と言われて、最初はかなり驚きました。

五十嵐 わたしもアイデアを見たときすごいおもしろいなと思う一方、本当にこれできるんだろうかと思っていたりしていました。緑ってかなりインパクトのある色だと思っんですけども、例えば透明のホースを使うとか、そういうことは検討されたんでしょうか？

山中 もちろんいろいろな色のホースを取り寄せて検討したのですが、インドの写真を見ているときに、色が混ざり合っただけの街並みが見られると、ある種のカオスのような状態の街っていうものが、

1: 白い布をまとったホース什器
2: さまざまな色や素材のホースを企画展メンバーで確認する(撮影: 道広明日香)

うか？

上羽 民族資料を展示物として置く場合に、文化的配慮が必要になってきます。資料をつくった人や使ってきた人たちの意図に反する見せ方はしないという倫理観ですね。そこは我々背負っております。そのことを、最初に GENETO さんにお話をいたしました。その過程で、関連図書や論文をお渡ししたら、丁寧に読み込んでくださって驚きました。文化や社会についても一緒に学びながら展示づくりをしたと思っています。

布の展示手法

金谷 布を展示するときに資料管理の視点からどのような注意が必要だったのでしょうか？

小関 例えばホースですが、素材に含まれる可塑剤が問題だということを本館の保存科学専門の園田直子教授から聞きました。長時間ホースが資料に直接触れていると、可塑剤が資料に移りかねないという可能性があったので、展示資料に触れる部分には必ず PET フィルムや晒木綿布で養生してから資料を展示しました。



3: 展示する標本資料に合わせてホース什器を形づくる
4: ホース什器に事前にPETフィルムを巻き付ける
5: ホース什器の施工風景(撮影: 道広明日香)



バリ島の布市場に積み上げられた一枚布。技法も用途もさまざま(インドネシア、バリ州クランクン、2012年)

に沿わせて着付けることで、女性の衣装や男性の頭布となる一枚布である。まとってしまえば身体をしつかり包み込むが、じつは向こうが透けて見えるほど薄い布だということがわかる。壁面に張り付けるスタイルの展示では伝えることができない質感だろう。

あるいは、ユーモラスな形態のホースに巻き付けられた白い布。そこにどんな色や柄が載るのか、どんな人が身につけるのか、想像をかきたてられる。そう、一言で言えば、これは「余白」の多い展示である。四つの大きなテ-

マに沿って、厳選された標本資料が並ぶ。添えられた解説文も、読みやすい分量だが、情報量が決して多くはない。たちどころに何かを理解するというよりも、ひとつひとつ工夫をこらして展示されたモノに向き合い、テキストを読み、詳しい製作技法を伝える関連映像を見、またモノに戻る。そんな「循環的観覧」を誘う展示なのだ。

そして、展示物との距離が近い。博物館で布をこれほど間近に見られる機会は少ない。被ったヴェールの裏地がどんなふうに見えるのか、黒一色のブルカーにどんなに繊細な刺繍が施され、光を受けとめているか、野蚕の糸がどんなつややかさを帯びているか——。カールベリアアの踊りの衣装は、三六〇度に広がった形で置かれている。ミラーと色布で装飾されたスカートが踊り手の動きに合わせてダイナミックに旋回する光景は想像するしかないが、それもまた余白のひとつである。

布は社会のなかで動き、社会を動かす。その変幻自在さという特性こそが、布を民族、宗教、政治、経済といったあらゆる領域の問題を考えるのに適した素材 (food for thought) とする。この展示を通じて、布と社会の多様な関係に思考をめぐらせてほしい。

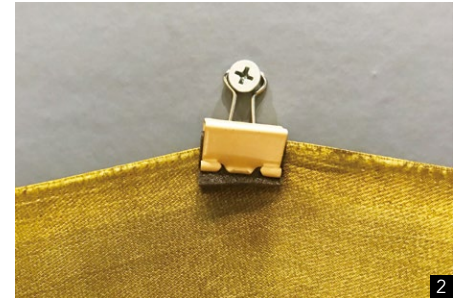
金谷 布は吊って展示することが多いですが、どういった演示具を用いるのでしょうか？

小関 演示とは、プロの手によって、資料をアクリルやテグスで固定したり、衣装や布を整えて展示することを指します。

布を壁に吊るすとき、今回の企画展では事務用品のクリップを多用しています。事務用品を？と驚かれることもありですが、クリップは色のバリエーションがあり、挟むものによって力の加え方もある程度は調整できます。さらに資料に縫い付ける必要もなく、その資料への負担も少ないため、非常に有用です。展示資料とクリップのあいだには、金具が直接触れないように、強い力が布資料にかかりすぎないように、和紙やソフトロンという緩衝材が挟み込まれています。

金谷 もっとも展示が大変だった資料は何でしょうか？

小関 現場で大変なものは、吊り物ですね。事前の準備ができず、現場で吊ってみないとわからないので、展示場の入口のサリイは大変でした。準備で時



1:レーザーの水平線に合わせてクリップで壁に固定する
2:クリップで布を挟み、持ち手の金具で壁に留める。もう一方の金具は外してある(撮影:道広明日香)

間がかかるのは、サリイの着付けです。美しく着せてあげないと、見栄えというか展示としてかっこよくないので。

上羽 布を自然にきれいに見えるように展示するのがじつは難しいんです。展示場では、吊るした布の長辺がたわまずにまっすぐに見えています。なにげなく見えますが、そこには演示の技術とセンスがまっています。今回の演示は、朝岡工房さん(あさおかこうぼう)にお願いしました。

小関 資料を掛ける木材は防虫のために必ず二酸化炭素処理をしてから使います。また、資料に負担がかからないように、和紙や晒木綿布を巻いてから使います。このときに朝岡工房さんは、布の意匠や重さを考慮して布を掛ける一部分だけに余分に折りたたんだ晒木綿布を入れるなど、とて



3:資料保存の観点から照度を50ルクス以下に合わせる(撮影:道広明日香)
4:展示する高さや位置のシミュレーション(撮影:道広明日香)
5:実際の展示方法を考えながら企画展メンバーで資料を選定する(撮影:道広明日香)
6:状態を見ながら展示資料を選定する

も細かい調整をしました。

上羽 カールベリアーという人びとの舞踊の衣装は、立体的に自然に見えるように展示されていますが、スカートの襷を丁寧にとり、胸元には少し綿枕(まくら) (薄葉紙で綿をくるんだもの)を入れてくださいましたね。

演示では、ヤマト運輸さんが資料をテグスで固定する作業をおこなってましたね。ヤマト運輸といえば、ものを運ぶことが専門だと思っている方が多いのではないのでしょうか。

小関 ヤマト運輸のなかには美術品輸送という部門があります。おもに資料をひとつずつ演示台にとりつける作業をします。この作業には三日間かかりました。本館企画課標本資料係と一緒に朝岡工房さんにも入っていただき、どんな位置を決めて演示台に固定していくという作業をします。

金谷 事前に資料をどのように展示するかも準備をしましたね。

小関 二〇二〇年の八月から企画展メンバーの研究者が集まって資料を見る熟覧(じゅくらん)から始めました。資料の状態を確認すると同時にどのよう布を演示するのかシミュレーションしました。本当は展示したいものでも、保存科学の教員と相談し、布が脆弱(ぜいじやく)になっているため選定外にしたものもあります。

さらに、吊るす、掛ける、置く、畳む、着付けるなど詳細な展示シミュレーションを一回おこないました。通常だったら二、三回で終わってしまうのですが、布だから何度もシミュレーションを重ねました。



7:長さや見せ方の調整に時間をかけたサリイとターバンの吊り作業(撮影:道広明日香)
8:立体的に見えるように展示されたカールベリアーの舞踊衣装

「境界性」の空間デザイン

山由 山中 由里子
民博人類文明話研究所

我々研究者は、さまざまな現象や思考を言語化、図式化する能力は日々鍛えているが、研究の成果を博物館の展示で来館者に直感的に伝えるには、空間デザインのプロの力を借りなければならぬ。今回の企画展は、建築家の方々のコラボレーションで、インド布の「躍動感」という抽象的な概念を、自在につながり、曲がるワイヤーを使って動的・立体的に見せるという、斬新で遊び心のある演示手法を取り入れている。

想像界の生物多様性と境界性

さて、わたしが実行委員長として企画にかかわった二〇一九年秋の特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」でも、建築家に空間デザインをお願いした。そのときの構想と協働のプロセスを紹介しよう。

みんなは世界の中の人びとが想像してきた幻獣の宝庫であり、特別展で

展示空間デザイン

金谷 展示コンセプトをどう具現化するかという話に移ろうと思います。

山下 展示設計をブラッシュアップしていくなかでCGのシミュレーションをつくりました。実際に展示したときにどのように空間が見えてくるのか、他の資料との関係性をどうしても立体的に頭のなかで認識しなかったたので、CGをつくって検討を進めておりました。

金谷 各章を黒布で区切っていますね。

山下 黒布で区切ることで、来場者の方が、今何章にいるのかということを確認できると同時に、章ごとにテーマが異なっていますので、それを頭のなかで切りわけきつかけにもなるようにしました。実際、展示会場のなかに立ったときは、それが連続してレイヤーのような状態で見えています。

五十嵐 会場を見て思ったのですが、空間をのれんみたいに仕切るっていうこと他に、第一章に立つと、出口までが見通せるし、出口からは第一章の方まで見えますね。同時にその空間の構成が、とても斜めというか、でこぼこしていますよね。インドの街並みの吹きだまりみたいな感じで、ちよつと首を傾けて、覗いてみないとよく見えないような空間と、このをうまくつくられたなと思いました。これは、どういう意図があつてされたのでしょうか？

山下 動線があまりにもはっきりしてしまつと、そこをまっすぐ進んでしまつてしまふか。ある種ごちゃごちゃと、秩序のないような状態にして、人が動き回れるような、何かを発見するような感じ。回り込



1: 自発的に資料を見ることを意識した動線

五十嵐 美術館でもそのような展示をすることがありますが、美術館ではアーティストの作品を展示したいとの希望があります。その作品のメッセージをどのように伝えるのかというのが美術館では優先されるので、作品と資料を展示する違い、博物館と美術館の違いによって、その展示空間をつくる自由度みたいなものが異なるのかなと思いました。

今回の企画展は、自発的に資料を見る空間、見る側の主体性を引き出すところがあるが、美術館でもしなかったですね。何かそういうことを、美術館でももっと仕掛けてやっていきたいなというふうに思いました。

金谷 そうですね、美術館での展示は、おそらく作品の方にグッと視線が集中するようにできているなと。一方、今回の展示は視線を遊ばせるところが非常に多いですね。

わたしは企画コンセプトをつくる側だったので、このコンセプトがどのように具現化するのだろうか



まないと見ることができない、あそこに何かがあるなという感じで、自ら発見できるような部分も意識しました。

山中 わたしたちは日頃、建築の設計やインテリアデザインの仕事が多いです。例えばお店ですと、動線がスッキリとしていると、お客さんが商品に出会う機会を失ってしまう可能性があります。そういった経験が、このような動線の展示空間デザインに活かされたと思っております。

と、非常に楽しみにしていました。実際に展示場に入ったときに、視覚優先ではなく、感覚が非常に刺激される空間になったと思います。これが美術館と博物館の違いなのかというのはちよつとわからないですけども。

五十嵐 ホース什器を使うとか、迷路みたいにするということ、よりその展示に介入するというか、GENETOさんにかかわっていたことで、展示空間がひとつの作品としてメッセージを伝えるというようなものにはなかったのではないのでしょうか。なので、展示空間があることによって、布の機能や役割をよりわかりやすく伝えることができたんじゃないかなと思います。一緒に仕事できて非常によかったです。

上羽 今回の展示は、共同研究から生まれた展示コンセプトをGENETOさんが展示設計し、それを朝岡工房さんやヤマト運輸さんなど多くの方々々と協働して形づくることができましたね。

金谷 展示の舞台裏を知ること、企画展の見方もより深まるのではないのでしょうか。

すでに見てくださった方は、改めて来てくださると、より一層楽しんでいただけると思います。企画展は二〇二二年一月二五日まで開催中ですので、まだお越しになっていない方はぜひ足を運びください。

※本クロストークの様子は国立民族学博物館の公式YouTubeチャンネルにて二〇二二年一月二五日(火)までの期間限定でご覧いただけます。

2: 演示ではいかに展示メッセージを伝えることができるかを考え、それを企画展メンバーで検討しながら進める(撮影:道広明日香)

3: 丁寧に装をとることで自然にきれいに見えるように調整をする(撮影:道広明日香)

はその「生物多様性」を見せたかった。かくして、人魚、竜、鳥人、天馬、巨人など、地球上の動物界、植物界、鉱物界に見出だされた素材をプリコラージュ(寄せ集め)した多様な合成生物を特別展示館の一階部分に大集合させ、それをひとつのコスモスと見立て「水」・「天」・「地」の三つのセクションにわけた。

しかし、世界の霊獣・幻獣・怪獣たちの多くが「狭間」の生きものであり、水天地の要素にきれいに分類できるわけではない。例えば人魚であれば、水に生きるヒレ動物と地上に生きる人間が融合したもので、「水」と「地」のゾーンが重なる境界域に属する。概念上はベン図でこの境界性は示せるが、それを空間上にどう落とし込むか。

空間の魔術師

特別展「驚異と怪異」の空間デザインをしてくださったのは、京都の建築家、若林広幸氏。プロダクトデザイナーもされており、関西ではお馴染み、南海電鉄の空港特急ラピートは氏の代表作のひとつである。氏は収蔵庫での展示品選定作業からお付き合いくださり、資料の特性やこちらの意図をくみ、円形で中央に吹き抜けがある特別展示館の空間を、「驚異と怪異の



特別展示館でまず来館者を迎えたのは天井の龍(撮影:大道雪代、2019年)

迷宮」に見事に仕立てた。この空間の魔術師は、展示台の幅や高さの規則性で柱廊のようなリズム感と統一感を出しつつも、正面の大階段に対して動線となる通路の角度を四五度ずらして平衡感覚に揺さぶりをかけてきた。かつ、壁面を立ててセクションを区切るのではなく、複数のセクションの展示物が重層的に見えるような配置にし、動線も、まさに迷宮のように、行きつ戻りつしてあえて少し迷っても楽しい、というものにした。

このような空間に落とし込まれて、「そこか、"liminal not linear"か」と改めて気づいた。分類不能なクリヤーチャーたちは、線引きできない、一直線上でもあらわせない。その境界性のパワーが、空間の魔術で立ちあらわれた迷宮のなかで、一気に放たれた。

異類に変身することで何かしらの「力」を得る。いわゆるシャーマニックな伝統をもつ人びとのあいだでは、こうした異類変身譚が語られることが少なくない。シャーマンや霊媒とよばれる人びとは、太鼓や口琴や向精神物質などの助けを借りることで野生動物や精霊といった非人間へと変身する。今回は、みんぱくの展示場をめぐりながら異類変身の旅へとご案内しよう。

シベリアのシャーマン

まずはシャーマンといえば、シベリアだ。その語源が、シベリアの狩猟牧畜民エヴェンキの「サマン」という語に由来するからだ。シベリアのシャーマンたちは、獣や鳥のような姿をしている。頭にシカの角を生やした冠を被り、獣の毛皮を纏ったパターソン。エヴェンキのシャーマンは、このタイプである。



17世紀のオランダ人探検家ニコラス・ウィツェンの著書『北東タールの地』(1692年)のなかに描かれたトゥングース系民族のシャーマン (出典:Wikimedia Commons)



トゥヴァ人のシャーマン用衣装 (ロシア、H0088423ほか)

みんぱく回遊

異類変身の旅

島村 一平
民博学術資源研究開発センター

一方、ワシなどの羽根でできた帽子を被り、猛禽類のような姿をとるシャーマンもいる。中央・北アジア展示場の「シベリア・極北」セクションの、南シベリアのトゥヴァ人のシャーマンは、この後者の猛禽類タイプである。野生獣や猛禽類の姿をしたシベリアのシャーマンたちは、鬱蒼とした針葉樹林を舞台に、毛皮を纏い円形の革張りのドラムを叩きながら、激しく踊り狂う。そして森の動物霊と交信するのである。シベリアの狩猟民は動物の命を奪い食することに生きていく。彼らは、動物から命を奪う以上、その代償として自分たち人間に病気や死がもたらされるのだと理解してきた。そこで狩猟民たちのあいだでは、森の主たる動物の姿をとることで、狩りの成功を願い、病気や死を回避するために森の動物霊と「交渉」する人物が必要とされた。それがシャーマンである。だからシャーマンは、森の動物霊と同じ姿に「変身」するのである。

動物に姿を変える人びと

動物への変身は、南米の先住民たちの文化にも見出すことができる。例えば、メキシコの民話に登場するナワルは、イヌやイタチ、ジャガーといった動物に変身するシャーマンたちのことである。ナワルは「もうひとつの自我」である動物に変身するだけでなく、稲妻のような自然界の力にも姿

人から「人」へ

翻って現在、モンゴルの都市のシャーマンたちは、動物ではなく「人」に変身するようになってきている。彼らの頭の帽子には、シベリアのシャーマン同様に猛禽類の羽根がついているものの、その形は清朝時代の王侯貴族のものを模している。帽子には、シャーマンに憑依する精霊の目がついている。近年、首都ウランバートルでは、資本主義的価値観の浸透と激化する競争のなかで、身心の調子を崩した者たちがシャーマン



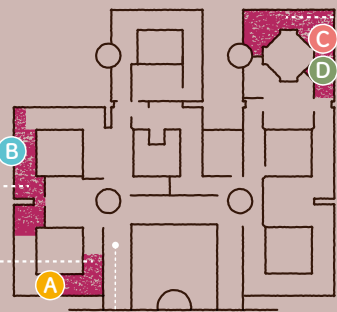
と激化する競争のなかで、身心の調子を崩した者たちがシャーマン

を変えたいといわれる。ナワルは、現在、観光資源ともなっている。アメリカ展示場には、アレブリアへのナワル像が展示されている。アレブリアとは「空想的な生き物」の工芸品のことである。白い髪を蓄えた半獣半人は、ヤギに変身したナワルだということ。同じくメキシコの先住民ウィチヨルは、ニエリカという毛糸絵を作ること知られている。ニエリカは、マラアカメとよばれるシャーマンが向精神物質を含むサボテン、ペヨーテを摂取することで見たビジョンを描いたものである。そこには、神の使者である鹿人間力ワユマリエが描かれることが多い。本館では約五〇〇点の毛糸絵を所蔵している。ウィチヨルのシャーマンは、シカやオオカミといった動物霊の助けを得ながら修行をし、自身がオオカミに変身する者もいるといわれている。アフリカ中南部、ザンビアのチエワの人びとのあいだでは、仮面舞踊、憑依、邪術の三つが、人間が動物へと変身する方法だとみなされている。仮面舞踊の踊り手ニヤウは、ニヤウ・ヨレンバに変身する。ニヤウ・ヨレンバは森の野生動物であると同時に、彼らの先祖霊であるとも考えられている。

アフリカ展示
「祈る」

中央・北アジア展示
「モンゴル」
「シベリア・極北」

アメリカ展示
「創る」



観覧券売場
本館展示場

B ニヤウ・ヨレンバ(ハイエナ)
(ザンビア、H0168242)

A 木彫「ナワル」
制作:A.ヒメネス、I.ヒメネス、M.ヒメネス
(メキシコ、H0268518)

C シャーマン用衣装
(モンゴル、H0277263ほか)

Hからはじまる番号は標本番号です。

ンになっている。ひとたびシャーマンとなると、王侯貴族や伝説上の英雄、過去の大シャーマンが憑依してくるので、親族や知人から傅かれるようになる。つまり王侯貴族や英雄に変身することで、彼らは心と体のバランスを取り戻しているのである。このように人は暮らす環境によって変身する異類の種類や姿を変えていくようだ。それだけ我々人類の暮らす環境や欲する在り方が多様だということなのかもしれない。

みんなく インフォメーション

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の状況によっては、催し物の予定を変更・中止する場合があります。事前に本館ホームページでご確認ください。

イベント予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内

<https://www.minpaku.ac.jp/event>



企画展

「躍動するインド世界の布」

インド世界の布は、場をくぐり、人をつなぎ、神と人の媒介となり、政治をつごかし、グローバル経済をつみだす。このように躍動する布の現場に光を当て、本企画展ではインド社会をつくりだしている人ひとの営みを多彩な布とともに紹介します。

会期 1月25日(火)まで
会場 本館企画展示場

みんなく映画会

みんなく映像民族誌シアター

本館オリジナルの映像作品である「みんなく映像民族誌シリーズ」のなかから選定した作品を上映後、監修者によるトークをおこないます。

参加形式
①会場参加 シアターセブン(大阪・十二) (定員26名)
②オンライン(ライブ配信) (定員100名)

「土と火と水の葬送」 ——バリ島の葬式」

日時 1月22日(土) 13時30分～16時
(13時開場)
解説 大森康宏(本館名誉教授)
司会 南真木人(本館教授)

【申込期間】
■一般受付
1月14日(金)まで

※友の会先行受付は終了しました。

「アシエンダダ! — エチオピア北部 地域社会の女性のお祭り」

日時 1月29日(土) 14時～16時
(13時30分開場)
解説 川瀬慈(本館准教授)
司会 南真木人(本館教授)

【申込期間】
■一般受付
1月21日(金)まで

※友の会先行受付は終了しました。

「王の祭り — 仮面の王国マンコン、カメルーン高地」

日時 2月6日(日) 13時30分～16時
(13時開場)
解説 端信行(本館名誉教授)
飯田卓(本館教授)
司会 南真木人(本館教授)

【申込期間】
■一般受付
1月5日(水)～1月28日(金)

※友の会先行受付は終了しました。

「インドの染色職人カトリー ——カッチ地方の絞り染めと更紗」

日時 2月23日(水・祝)
13時30分～16時(13時開場)
解説 上羽陽子(本館准教授)
金谷美和(国際ファッション専門職大学准教授)
司会 南真木人(本館教授)

【申込期間】
■友の会電話先行予約
1月11日(火)～1月17日(月)
定員5名、会場参加対象
【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)

■一般受付
1月18日(火)～2月18日(金)

「第50回みんなくワールドシネマ 「テルアビブ・オン・ファイア」

撮影所で働くパレスチナ人青年を主人公に、文化的に依存しあうパレスチナとイスラエルの現状を痛烈に皮肉ったブラック・コメディです。

日時 2月12日(土) 13時30分～15時50分(13時開場)

会場 みんなくインテリジェントホー

【申込期間】
■友の会電話先行受付
1月5日(水)～1月12日(水)
定員30名
【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)

■一般受付
1月13日(木)～2月4日(金)

【申込期間】
■友の会電話先行受付
1月5日(水)～1月12日(水)
定員30名
【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)

■一般受付
1月13日(木)～2月4日(金)

「年々開始干支ガイドマップ 「みんなくトラの巻」 配布イベント」

2022年の干支である「トラ」を展示場で探ることが出来るガイドマップを配布します。ガイドマップの裏面は2022年のみんなくオリジナルカレンダーになっています。参加者には参加賞を贈呈します。

日時 1月8日(土)、9日(日)
10時～17時(16時受付終了、配布予定数がなくなり次第終了)
受付場所 本館エントランスホール
会場 本館展示場
※当日随時受付、各日先着150名、参加無料

年始の開館のお知らせ

年始は1月6日(木)から開館します。

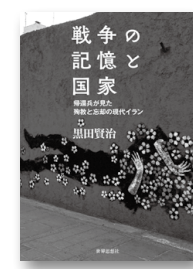
刊行物紹介

■藤野陽平、奈良雅史、近藤秋 編
『モノとメディアの人類学』
ナカニシヤ出版 2,860円(税込)



本書は、スマートフォンやソーシャルメディアが普及した近年の新しいメディア状況を踏まえ、そこでの具体的なヒトとモノとのかわりに焦点を当ててメディアと社会の関係を文化人類学的に捉え直す。

■黒田賢治 著
『戦争の記憶と国家
——帰還兵が見た殉教と忘却の現代イラン』
世界思想社 3,520円(税込)



中東の大国イランで政治的に台頭してきた「軍」勢力の社会的支持基盤を、イラン・イラク戦争のある帰還兵に着目しながら、フィールドワークを通じて彼と彼の周辺で生起してきた事件・事象を手掛かりに検討した。

みんなくゼミナール

参加形式

- ①会場参加 みんなくインテリジェントホール(講堂)(定員160名)
- ②オンライン(ライブ配信)(定員300名)
・要事前申込、先着順、参加無料
・当日参加受付あり(会場参加のみ、定員30名)

第517回

1月15日(土) 13時30分～15時(13時開場)
大規模災害の経験を伝える
——遺構・記念碑・語り部・博物館の役割
講師 林敷男(本館 教授)

【申込期間】

■一般受付 1月12日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第518回

2月19日(土) 13時30分～15時(13時開場)
遙かなる山々
——アンデス文明探求40年の軌跡
講師 関雄二(本館 教授)

40年以上におよぶ南米アンデス文明の遺跡

の調査を通じて、いったいなにを明らかにしてきたのか、そしてこれから何を解明しようとしているかを論じます。

【申込期間】

- 友の会電話先行予約
1月11日(火)～1月14日(金)
定員30名、会場参加対象
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
- 一般受付 1月17日(月)～2月16日(水)



ペルー北高地
バコバンバ遺跡
(撮影: Heinz Plenge)

みんなくウィークエンド・ サロン —— 研究者と話そう

会場 第5セミナー室(定員42名)
※申込不要(当日先着順)、参加無料(要展示観覧券)、14時より整理券配布

※各回、開始30分前に開場

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域(国)の最新情報」「みんなく展示資料」についてわかりやすくお話しします。

1月9日(日) 14時30分～15時
トライブ・アイデンティティとしての布
話者 岡田恵美(本館 准教授)

1月16日(日) 14時30分～15時15分
モーディー首相、サリーになる
話者 杉本星子(京大文部学 教授)
上羽陽子(本館 准教授)

1月23日(日) 14時30分～15時
**みんなく資料から見る
日系アメリカ人収容80周年**
話者 丹羽典生(本館 准教授)

1月30日(日) 14時30分～15時
**移動する商人の自由と
内なる不自由**
話者 三島禎子(本館 准教授)

アンケート ご協力をお願い

みんなく創設50周年を記念して、『月刊みんなく』が新しくなります。読みやすく楽しい内容でお伝えする雑誌を目指し、読者の方がたの声をできるだけ盛り込んでいきたいと思ひます。本誌の新しい方向性を見出すために、アンケートにご協力いただきたくお願い申し上げます。右記URLよりご回答ください。 <https://forms.gle/RsTeW4Sm8EiyhwXQ8> 締切: 1月31日(月)



お問い合わせ

国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム <https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form>



友の会

友の会講演会

受付フォームは友の会ホームページ内にあります。会場参加のみ、会員以外の方もご参加いただけます。
※会員: 無料(会員証提示)
一般: 資料代500円

参加形式

- ①本館第5セミナー室(定員40名)
- ②オンライン(ライブ配信)(定員100名)
※要事前申込、先着順

第520回 1月8日(土)13時30分～15時

家を廻る芸能のいま
——伊勢大神楽の活動を中心に
講師 神野知恵(人文知コミュニケーション、本館 特任助教)
世界各地には、寺社や舞台で演じる芸能だ

けでなく、芸能者が家々を訪れて演じる芸能が見られます。日本にも専業芸能者による「門付(かどづ)け」が多様に存在しましたが、その多くは戦後に姿を消しました。今回の講演では、現在も西日本で厄祓いの巡行を続ける伊勢大神楽について紹介し、彼らの活動の継続性の理由を探ります。

受付フォーム
<https://www.senri-f.or.jp/520tomo/>

第521回 2月5日(土)13時30分～15時
記憶が生まれる、記憶をつむぐ
——南米アンデス文明の文化遺産保護の道のり

講師 関雄二(本館 教授)
講演者は、過去40年以上にわたってアンデス文明の形成過程を追うかたわら、文化遺産の保護を地域住民とともに実施してきました。本講演では、その足跡を辿るとともに、

地域住民が抱く文化遺産に関する記憶に注目し、文化遺産保護の共創プロジェクトを実現する方法を考えます。

受付フォーム
<https://www.senri-f.or.jp/521tomo/>

みんなく友の会オンラインレクチャー
みんなく研究者によるミニレクチャー動画を友の会ホームページ内で公開しています。新シリーズは友の会の機関誌「季刊民族学」との連動企画です。

公開ページ
<https://www.senri-f.or.jp/category/events/online/>

お問い合わせ

国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp



マヤの地にかかわって 半世紀

八杉 佳穂
民博 名誉教授

もう半世紀も前のこと。初めてマヤのことばを聞いたのは、メキシコのサン・ルイス・ポトシ州に住むワステコの人びとからであった。ワステコ語がマヤの中心地から離れた場所で話されているのはいまだに大きな謎だが、紛れも

なくマヤ諸語のひとつであった。マヤ諸語に特徴的な声門閉鎖音は、文献によると、喉をしめて一気に息を吐き出すと書いてあったが、そんな苦しい発音をする言語音なんてあり得ないと思っていた。しかし「百読は一聞にしかず」で、

どのような音なのかいろいろ想像して何年も悩んでいた音がすぐさま発音できたのである。発音に何の負担もなく、言語音としてあり得る音だと得心がいった。

真逆への期待

情報のない時代、日本と反対側にある異国には、男性と女性の役割が真逆の社会があつてもいいのではと妄想を抱いて調査に向いたのだが、どこの社会でも男女の役割の違いはあまりなかった。男は畑仕事や商売など外に働きに出かけ、女は家庭で炊事洗濯をするといったことは共通であつた。

ところがまったく反対のことはあるもので、それをマヤ諸語に見出した。日本語とは真逆で、動詞が最初にあつて次に目的語、最後に主語がくるので

ある。日本語は、例えば「太郎の家」のように修飾語の「太郎」に「の」という修飾のマークが付くのだが、これも反対で、被修飾語の方にマークが付く。副詞のマークが、名詞や形容詞に付くのではなく、動詞に付くということもわかった。真逆のことだらけであつた。

村に入る

七〇年代にはまだ、都市から離れた村では人びとの交流はあまりなく閉鎖的で、異邦人のわたしが行くと、不審げにじろじろ見られ、不気味に感じることも多かった。日本のことを知っている人は皆無で、オレンジを地球に見立て、日本が反対側に位置することを説明したのだが、ほとんどわかってもらえなかった。何しろいくつ山を越えてき



資料収集の際、頭帯の締め方を実演してもらった
(グアテマラ、ナワラ、1993年)

たかと、真顔で聞かれるそんな時代だったのだ。
人見知りなわたしにとって、知らない村に入って、泊めてもらうなんて、とても考えられなかった。しかし、人は自分を映す鏡である。そう思い、心を整えて、笑顔で接すると、なんとか受け

入れてもらえることがたくさんあつた。初めてマヤ人の家に泊めてもらったのは、グアテマラ高地のトトニカパンの郊外の村に住むキチェ人のホセ君のところだった。ああやつとマヤ人と一緒に住むことができた感激したことを今でも鮮やかに思い出す。電気も水道もトイレもない家で、とても質素な食事だったが、生き生きと生活している。バランスのよい食事をとるか、栄養がどうかかわる日本人がかえって変に見えてしまった。

八一年には、古文書で調べて興味の

わいたユカタンの村に、勇気をもって入っていくことにした。受け入れてくれる人がいるかどうか不安で仕方なかったが、幸い、いい人に出会い、彼の家に居候することになった。一月ほどの滞在中、学ぶことばかりで、彼らの生活改善に役立つ知恵や術を何ももたない自分が情けなくなったのだが、せめてもと思ひ、お礼をいくばくか包んで渡したところ、半分返すという。半返しはユカタンでもあるのか、真逆どころか我々と同じでないか、とうれしくなつて、倍返しすることにした。

グローバル化による急速な変化

八〇年代の後半になると、マヤの村にも日本車やテレビなどが普及し、日本を知っている人が増えてきた。グローバ



90年代から民族復興の気運が盛り上がり、そのひとつとしてアグアカテコ語で弁論大会を催すようになった。
発表前の指導の風景(グアテマラ、アグアカタン、2001年)



上:調査のとき寝泊まりをしたところ。壁がなく、低地といえ、朝夕は寒かった(メキシコ、ベンクユット、1981年)
下:カクチケル語の調査。みんなコンピュータを使いこなしている(筆者提供、グアテマラ、アンティグア・グアテマラ、2010年)

ル化は一層進み、今ではマヤ人たちも携帯電話やコンピュータを自由に操って、世界とつながっている。
この半世紀の変化は、日本もそうだが、驚くべきものがある。それは地球の存亡にかかわるほど深刻な変化といつていい。
博物館にいたことで、民族資料の収集という貴重な調査活動もさせてもらった。がむしゃらに収集した一万点以上の品は、時代が変わり、もう集めようにも集められないものが多くなった。「君たちの子や孫の時代には、民博にしかなくなるから、民博においで」と冗談交じりで言ったことが、早くも現実味を帯びてきた。



土器の野焼きの風景(グアテマラ、ラビナル、1993年)



この部分がマヤ地域



調査のとき世話になったカエタノ家の人びとと筆者(後列中央)(筆者提供、メキシコ、ベンクユット、1981年)

マヤのことばを調査してみました

バスケットリ-を楽しむ

ほんま かずえ
本間 一恵
バスケットリ-作家

バスケットリ-は先史時代にすでに作られていた形跡があり、工業製品の何倍もの歴史を有する人類の知恵である。コロナ禍の今、我々の生活にも変化が生じているが、天然素材からモノを作るといふ行為の大切さも見直されていくのかもしれない。

時空に広がるバスケットリ-

四五年前の開館当時から、わたしは何度も民博を訪れた。展示室のあちこちに見つかる編み組み品に興味を惹かれ、閉館時間になると背後に警備員さんの気配を感じながら、しぶしぶ出口に向かったものだ。『月刊みんぱく』『季刊民族学』を通じて世界中をめぐることもできた。どのような地域やテーマの記事でも、どこかにかごが写っていたりする。草の茎を束ねると船にもなるんだ！と大いに驚き、わたしのバスケットリ-の世界は大きく広がった。

かご類の多くは、植物から作られている。まったく編む材料になるものが生えていない自然環境のところもあるだろうが、多くの場所では、なにかしら編む材料が調達できる。わずかな草本類しか入手できないような場所で、手の込んだ精緻なかごの文化が見られたりもする。遠く離れた場所で作られたかごが、よく似ていることも面白い。モノや技術は思いがけないほど古い時代に遠くから伝わっていたりするようで、かごの場合も来歴がわかるものもあるのだが、基本的な技術は、あちこちで自然発生的に生まれたのではないかと



上：コロンビアの現代のかご(左)と、筆者が復元した弥生時代のかご(右)
下：紙バンドと紙の作品「キラル」 筆者作 2014年

現代のバスケットリ-

一九八〇年代のはじめ、アメリカで現代工芸のなかに新しいバスケットリ-の分野が生まれ、そこで学んで影響を受けた関島寿子さんが、帰国後東京テキスタイル研究所で教え始めた。わたしを含め、そのクラスのメンバーで始めたバスケットリ-展は、

昨年で三三回目となった。実用のバスケット類と違い、ここでは素材の選択も形態も自由な立体作品が生まれてきた。同じころ、『バスケットリ-ニュース』という冊子が作られ始め、現在はわたしが発行を継続している。そのなかの連載、「目の前にあるかご類を見てその作り方を推理して作ってみる」というシリーズは、かごの構造や知恵を理解

手と自然素材

一昨年コロナ禍となり、家のなかに籠もることが多くなったせいも、窓の外に生えている一本の樹の存在感が増してきた。樹皮を材料にしようと思つて植えた楮こうの樹だ。

自然素材は朽ちてやがて土に還る。わたしたちはそのあいだを少し利用させてもらい、使える形にして生活のなかに取り入れていく。そのノウハウは、長い時代を経て蓄積されてきたのだが、はじめころはいろいろ試して実験してみたことだろう。それにならつて、まずは剪定した枝から樹皮を剥ぎ、裂いたり叩いたり削ったり、いろいろ働きかけてみようと思ひ立った。楮は和紙の原料だから紙のようにもできるだろう。編むのはそれからしよう。そういえば、素材を变身させるといふのは、バスケットリ-のクラスで出された基礎課題だった。

短くて脆弱な端材も、撚り合わせれば長い縄になるので捨てられない。材料に撚りをかけるときに生じる指先のこの感覚を、何万年も前のヒトと共有していると思うと、不思議な安堵感をおぼえる。手で編むという行為はこれからのどのような形で続いていくのだろうか。



左上：切り落とした楮の枝。ここから編む材料に变身させる(2021年)
右上：外皮を削り取ってから、樹皮を剥がしているところ(2021年)
下：上の楮の樹から取り出した素材を編んだ作品群。「一本の樹からのバスケットリ-」シリーズより 筆者作 2021年

南インド 古典音楽界の光と影

小尾 淳 おび じゅん
大東文化大学助教

インド社会に深く刻まれたカースト問題を背景に、一人の青年がムリダングム（南インドの両面太鼓）奏者を目指し、葛藤しながらも自らのリズムを会得する過程を描く。日本では二〇一八年の東京国際映画祭で邦題「世界はリズムで満ちている」として上映され、高い評価を得た。著名な作曲家であるA・R・ラフマーンが音楽を担当し、一流音楽家がカメオ出演するなど、随所に織り込まれた音楽シーンも見どころのひとつである。

目に見えない境界線

「お前はジョンソンの息子だ」。主人公のピーター・ジョンソンがムリダングムの巨匠ヴェンブ・アイヤル（アイヤルはバラモン・カーストの一派）に弟子入りを請うたときに返された一言である。インド社会に詳しい読者であれば、この台詞からジョンソン家がダリト（被抑圧者）・クリ

スチャンであることを類推するかもしれない。インドのマイノリティであるクリスト教徒の多くはヒンドゥー教からの改宗者であり、しばしばダリト出身であることが知られているからだ。父ジョンソンは地方から都市チェンナイに移住しムリダングム工房を営む。古典音楽界を支える工芸士としてタミル・ナードゥ州政府から功労賞を授与されてもいる。ただ、浄・不浄の観念を重んじるヒンドゥー教徒から見れば、動物の革を扱う者は今日でも観念的な「穢れ」が付随する存在として映る。ジョンソンが職人としての務めを果たす一方で、都会っ子の息子ピーターは映画スターのファンクラブ活動やガールフレンドに夢中である。しかしある日、父親の使い先でヴェンブの演奏を目の当たりにしたピーターは衝撃を受け、熱心に弟子入りを請う。そこで、門前払いされたことで初めて自らの出自を自覚し、師匠とのあいだにある境界線に気づかされる。

古典音楽界の権威主義

多くのインド芸能はさまざまな担い手集団によって継承されてきた。これは血縁による芸の継承を重んじる日本の伝統芸能の世界に通ずるところもあるが、インドの場合は「カースト」すなわち階層化された身分制度と複雑に絡んでいるところに違いがある。かつてのヒンドゥー社会ではさまざまな分野において分業体制が構築されていた。本作の舞台となるカルナータカ音楽（南インド古典音楽の世界も複数のコミュニティから成るが、なかでもバラモンが果たした役割は大きかった。本作には「カルナティック音楽協会」という機関名が頻出するが、これはタミル・ナードゥ州チェンナイの音楽振興機関「マドラス音楽アカデミー」をモデルにしていると思われる。イギリス植民地時代を経て、一九世紀後半から各地で自国の芸術文化を再評価する動きのなかで、マドラス（現チェンナイ）では西洋教育を受けたエリート・バラモンが中心となり、一九二八年に同協会が設立さ

身分差を超えた師弟の絆

ピーターの熱意に動かされたヴェンブは遂に彼を受け入れ、愛情を注ぎ、ピーターは天賦の才を開花させていく。ヴェンブの音楽家としてのピークは過ぎており、技を伝授するに値する弟子を求めているのだ。しかし、長年師匠に尽くしてきた兄弟子から、ピーターは執拗な嫌がらせを受ける。近年ではオンラインレッスンが定着し世界中に生徒をもつ音楽家もめずらしくないが、伝統音楽の世界では、かつて弟子は住み込みで師匠と生活をともにしながらその

生き様までまろごと学んだものだった。無論本作で描かれるような身分差を超えた師弟愛が現実には成立するかわからないが、保守的な伝統音楽界の暗部に正面から切り込んだ作品は稀であり、ラージーヴ・メーナン監督の気概が感じられる。

「世界はリズムで満ちている」(東京国際映画祭邦題)
原題: சர்வம் தாளமயம்
2018年/インド/タミル語/131分/DVDあり
監督: ラージーヴ・メーナン
出演: G・V・ブラカーシュ・クマール、ネドゥムディ・ヴェーヌほか



マドラス音楽アカデミー
(タミル・ナードゥ州
チェンナイ、2020年)



ムリダングム
(提供: 竹原幸一)

南インド古典音楽コンサート
(提供: 竹原幸一、タミル・ナードゥ州チェンナイ、2017年)



チェンナイのヒンドゥー寺院(提供: 竹原幸一、2020年)

ママ！

こじま やすひろ
児島 康宏

東京外国語大学非常勤講師

ジョージア（グルジア）語ではママ（მამა / mama）は「母」ではなく「父」を意味する。おまけにパパ（პაპა / papa）は「祖父」なので、日本語や英語の話者にはなんだか奇妙な言語に見えるかもしれない。「母」はデダ（დედა / deda）という。ちなみに、筆者は現在ジョージア（グルジア）で暮らしており、家庭でジョージア語を話しているので、父親として息子からママと呼ばれる身である。

さて、さらにややこしいことに、このママやパパ、デダなど親族関係をあらわす名詞には、文字どおりそれぞれ父、祖父、母などを指すほかに、もうひとつ別の使いかたがある。小さな子どもに呼びかけるときに使うのだ。

例えば、息子・娘が父親に「ママ！」と呼びかけるのと同じように、逆に父親も息子・娘に「ママ！」と呼びかけることがある。つまり、子どもに呼びかける際に、その子どもにとっての自分の関係性をあらわす名詞を使うというわけだ。母や祖父、祖母、おじ、おばも同じである。すなわち、祖父は孫に「おじいちゃん！」と呼びかけ、おばは甥・姪に「おばさん！」と呼びかける。「おじの妻」をあらわすビツォラ（ბიჭმლა / bitsola）という名詞もあるが、やはりおじの妻は夫の甥・姪に「ビツォラ！」と呼びかける。

そんなわけで、例えば小説のなかで「ママ、こっちに来て」という台詞があったら、子どもが父親に対して言っているのかもしれないし、あるいは父親が息子や娘に対して言っているのかもしれない。これ以上ないほど単純な文だが、気

をつけないとまったく逆の状況を想像してしまいかねない。

ただし、親族関係をあらわす名詞のこのような使いかたは、あくまで呼びかける場合に限られる。例えば、「ママが来た」というような文は「父親が来た」という意味にしかならない。

ジョージア語を学びだしてまだ日が浅いころはそういう呼びかけかたがあるのを知らず、大人が小さな子どもを「お父さん！」とか「お母さん！」と呼ぶのを見てぎょっとしたものだ。でも、ジョージアではごくありふれた光景なので、そのうち見慣れて、理屈も理解した。

しかし、自ら実践するとなるとまた話は別である。息子がまだ小さかったころ、筆者も母語話者の真似をして何度かためしに「ママ！」と呼びかけてみたが、どうしても「お父さん！」と言っている気がしてしっくりこず、身につかなかった。文字どおりの意味を意識しすぎていけないのだ。これが意外となかなか難しい。

結局、「ママ！」と呼びかける感覚をよくつかめぬうちに、息子がだんだん大きくなってしまった。このような呼びかけかたは小さな子どもほどふさわしく、子どもが成長するにつれてあまり使われなくなる。今さら練習しようにも、こればかりはよその家の子をつかまえて呼びかけるわけにもいかない。

さて、いずれ孫を「おじいちゃん！」と呼べるころには、もっと母語話者のレベルに近づいて自然に使いこなせるようになっていっているだろうか。

『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく 2022年1月号

第46巻第1号通巻第532号 2022年1月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 三島禎子(編集長) 池谷和信 上羽陽子

岡田恵美 齋藤晃 吉岡乾

制作・協力 公益財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせや感想は、国立民族学博物館 広報・IR係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、再生産可能な大豆由来のインク、環境に配慮したFSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2022年

1月号

編集後記

フランスのケ・ブランリ美術館は、「生きた壁」とよばれる植物を植えこんだ外壁が斬新で、パリの街に異色の風景をもたらした。みんぱくと同じように世界の文化を展示する施設であるが、その建設の構想には「原始美術」があった。力点は芸術を展示するということにあり、みんぱくが研究資料を展示するという立場にあるのと大きく異なる。30年前の構想とはいえ、今でも論争が絶えない。

それはともかく、今回のクロストークの特集で思い出したのが、ケ・ブランリの独特な展示の仕方である。従来の置く、吊るす、引っかけるなどの手法をゼロから見直したかたちが随所に見られた。特に布の展示で特徴的だったのが、留めるとか掛けるのではなく壁に張り付けてある点であった。今回の企画展の実行委員長の上羽さんに聞いてみたところ、壁面が磁石になっているらしい。枠も吊るすための演示器具も必要ない、まるで一枚の絵画のようであった。また、畳大のガラスケースに布が挟まれた演示では、いくつかのケースが縦に合わせて並べられ、ひとつひとつを引き出して見る形式が、布見本を見るようであった。

今回の企画展では、インドの布の美しさとともに布の使用にかかわる世界観を伝えている。美術館とは異なる演示手法を見るのも楽しみである。

(三島禎子)

次号の予告 2月号

特集「日本列島の文化の多様性」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

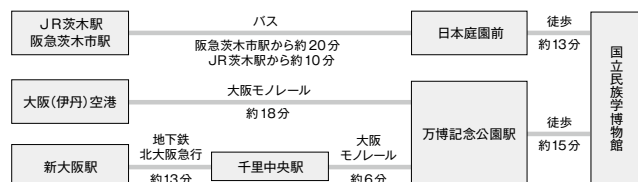
休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)

年末年始(12月28日~1月4日)



主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



いつでも、どなたでもご入会いただけます

国立民族学博物館友の会



国立民族学博物館友の会は、みんぱく（国立民族学博物館）の活動を支援し、博物館を楽しく、積極的に活用するためにつくられました。世界各地の文化について定期的に情報を得ることができる、さまざまなサービスを用意しています。

お問い合わせ

国立民族学博物館友の会（公益財団法人 千里文化財団）
TEL：06-6877-8893（平日 9時～17時）
email：minpakutomo@senri-f.or.jp

おもなサービス

- ・機関誌『季刊民族学』の送付
- ・『月刊みんぱく』の送付
- ・友の会講演会への参加
- ・本館展示の無料観覧
- ・各地提携館での割引

